

＜今、ブラジルの日系社会が危ない＞

＝ブラジルにおける日本語教育＝

近年、ブラジルの日系社会で日本語教育が停滞から衰退への道をたどり始めています。このまま放置すれば、ブラジル日本移民が110年かけて営々と築いてきた日本文化の根幹が揺らぎ崩壊し始めるのは必至です。

日本語で築いた日本の文化と力

ブラジルにおける日本語教育は第一回笠戸丸移民に始まります。移住当初の過酷な労働の時代から今日まで一世紀以上にわたり日本語教育は親から子へ、子から孫へ連綿と引き継がれてきました。電気や病院もないような大森林の中の移住地であっても、日本移民が協力して最初に造ったのが日本語学校です。

その歴史を振り返るとき、日本語教育現場の労苦を忘れてはなりません。当初は大人がボランティア活動で教師養成と学習者増に力を注ぎ、全ブラジルで教師約1,200人、学習生徒2万3千人、学校数350校に発展しました。現在、学習者数は微増ですが、日本移民が加速度的に鬼籍に入る近年は、日系人経営の日本語学校の閉校も見られ学習者数も減少傾向を辿っています。

日本移民の歴史と共に柔道、剣道、空手道、茶道、花道、民謡、カラオケ、ラジオ体操、運動会、盆踊り、碁、将棋、料理などの文化は今日まで受け継がれてきました。ここ数年、若者にはアニメや漫画に人気があり、各県人会の活動も彼らに引き継がれ“母県”との交流活動は続いています。しかし、これは多岐にわたる日本文化の一部分で、すべてに共通する根幹はやはり日本語です。

多くのブラジル指導者を輩出

日本語教育は戦後も着実に進んできました。日系2、3、4世の政治、法曹、医学、教育、農業界での活躍は著しく、日系人への信頼度が高いのは周知の事実です。なぜなら、日本移民の子孫は日本文化を胸に、ブラジル人となって国家発展のために献身的な努力をしているからに外なりません。今年、日系ブラジル人の中からヨムラ・エウトン労働大臣、3人の陸軍中将や海軍少将が誕生。各界で活躍する日系人は概して日本語会話が流ちょうですが、それは語彙の中にブラジルにはない文化が包含されているからだと確信します。日本文化は日系人の心の支柱になっており多民族国家のブラジルで燦然と光り輝いているのです。

韓国・中国の進出に壊れる日本文化

しかし、時代は移り変わり近年韓国や中国からの進出が顕著です。韓国人は日本人が築いた東洋街以外の地区に韓国人社会をつくり、韓国語学校や商店を次々に建てました。特に、中国人は孔子学院をブラジル国内の10有力大学内に設置しております。ガブリエル独外相の言葉を借りれば、中国は「世界で唯一グローバルな戦略に基づいて駒を動かしている国」なのです。日本語教育を放置すれば、移民を送り出して築いた日本文化が揺らぐのは必至です。

日本移民時代の終焉と共に「思いやり、心配り、気遣い、優しさ、誇り、辛抱強さ、もったいない、遠慮、恥」などの日本語を普及・定着させるには日本語教育の継続的強化が必要です。優秀な若い日本語教師養成に即刻取り組まなければなりません。放擲すれば取り返しのつかない結果を招くでしょう。

教育には時間と資金が必要

教育というのは成果が出るまでに時間と資金を要します。一朝一夕に成就するものではありません。麻生財務大臣が「今回の冬季オリンピックで過去最多のメダルを獲得できたのは良いコーチを迎えた結果」とおっしゃいました。教育も同じです。次世代教師を育成するには2、3世が積極的に取り組む教材などの研究開発部門設置が必要で、さらなる日本と日系社会との連携が不可欠です。

近年、日本文化に触れずに育ったブラジル人日本語教師が大半です。1世、2世から3世、4世の教師の時代に移行し、当然教え方も変化してきています。未来永劫の両国関係を考えるならば、今こそ「日本語による日本語教育」から「外国語による日本語教育」へ切り替えていくべきです。今それを怠れば、ブラジルの若者の日本語離れは加速度的に進むでしょう。

私が理事長を務めます「ブラジル日本語センター」は、日本語教師養成と日本語学校支援を目的とした非営利団体で、JICAや国際交流基金と連携し33年間南米全域の日本語教師のレベルアップにも力を注いできました。1985年から開始した教師養成講座は590人の教師を輩出し、また、05年からは学習生徒約40人を日本へ過去6回派遣、秋篠宮さまご一家様との交流を毎回実現しており日本語を学ぶ若者の育成にも努力しています。ご接見につきましては、両国交流にご尽力いただいている日本・ブラジル友好議員連盟の河村建夫幹事長のご理解によるものでした。この場をお借りし深くお礼申し上げます。

また、当センターは2016年に国際交流基金賞を受賞、これまで限られた資金の中で僅かな会費と寄付金や支援金で運営されてきました。毎年の資金繰りを危惧するような日々ですが、このような状態ではブラジルにおける日本語教育が長続きするはずがなく、行く行くは断念せざるを得ません。手遅れにならないうちに日本国政府の多大のご理解、ご支援を切望するところです。

謙虚で寛容な日本文化再生を

日本とブラジルは補完関係にあり世界最大級の友好国です。また、諸外国に住む約300万人の日本人・日系人のうち、ブラジルには180万人（熊本県民総数に匹敵）が住み最も多く、地理的には遠くても心情的には最も近い特別な国です。日系ブラジル人は日本に対していつも心に熱いものを持ち続けています。以上述べましたことは、36年間サンパウロ市に定住しジャーナリストの立場で日系社会と日本語教育事情を注視し続けてきた私の現時点での結論です。

最後に、昨年4月、日本政府による世界初の「ジャパン・ハウス」がサンパウロ市にオープン、開館式にテメル大統領が出席されました。同大統領は挨拶でこのような祝辞を述べています。日本が遠い存在にならないよう、このメッセージを関係者すべての方々の心に留めておいていただきたいと思います。「（ブラジルに住む）日本人・日系ブラジル人の教育程度は高い。謙虚で寛容な日本文化はブラジル国家の発展に貢献している」。